

## 6 人間観

### 6-1 人間の分類

#### 6-1-1 性と年齢による分類

エカチ ekaci 子ども。ポン エカチ pon ekaci 赤ちゃん。

[阿寒 小鳥サワ氏]

#### 6-1-2 技能と性格による分類

意地悪（主にけち）な人をイキウエンベ ikiwenpe という。（男の人にも女の人にも使える）。イキウエンとは人にもものもくれないで自分だけ持っている人、たくさん食料があるのに、腐らせても人にはあげないような人のことをいう。

だらしない人をイチャツキリ icakkiri という。

うそつきは、チャロウエン caro wen という。うそばかりついている人をシュンケ カニチャロウエン sunke kani caro wen という。

仕事をしない人は、トランネ toranne という。

がんばって働く人はモニキ moniki というが、モニキとはよく働くという意味だと思う。

ハンサムでいい男のことをピリカ オクカイ pirka okkay という。

美人（女）をピリカ メノコ pirka menoko という。

[阿寒 小鳥サワ氏]

美幌の野崎に住んでいた徹辺のおばあさん（オンネチセ onne ciseのハポ hápo と呼ばれていた）はキナ kina をきれいに編んだ。

[美幌 平林ミツエ氏]

#### 6-1-3 身分・家系による分類

徹別の父の家はオンネ チセ onne cise（村長格の人の大きな家）だが、もう一つ茅葺きのオンネ チセがあつた。片一方のオンネ チセに不幸ができた時には、お祝い事ができなくなるのに備えて、二つのオンネ チセがあつた。一軒のオンネチセに不幸があつた時には、残りのオンネ チセでお祝い事をする。だから、普段も人が集まるのも二軒のオンネチセで交替でしていた。ヌサ nusa（祭壇）にはカムイノミ kamuynomi（神への祈り）するヌサとイチャ

ルパ icarpa (先祖供養) するヌサがあつた。家の中にヌサはない。

父のオンネ チセは、川の下の方にあつた。もう一つのオンネ チセは川上の方、阿寒湖よりの方にあつた。

カムイノミをできるような人はオンネ チセの人で、父が川上のオンネ チセのエカシが亡くなった時にカムイノミをした。

父が亡くなった時にお祈りをしたのは、川上のオンネ チセの2代目だった。

[屈斜路 日川キヨ氏]

私の家は、悪いもの(ウエンベ wenpe)もなくピリカピリカプ pirkapirkap (何事も無く)と育つた。私は、5人の女きょうだいの3番目だ。男きょうだいがいなかった。私が女で一番弱かつたが、皆死んでしまつたが私が一番長生きしている。

[屈斜路 日川キヨ氏]

クマを獲る家だけが、上座にカムイノミをする時の炉があり、下座に煮炊きする炉があつた。(道東編9—3—2参照)

[阿寒 小鳥サワ氏]

仔グマを飼つたりする村長格の人の家は、普通の人の家より大きくて、上下2つの炉がある。しょつちゅうクマを捕つたり仔グマを預かつたりするので、カムイノミ kamuy nomi をすることが多く、炉が二つ必要だ。村の人もみなクマを捕つたら炉の二つある家に持つて来る。こういう家の人はみんなから尊敬されている人だ。普通の人の家は小さいので炉が一つだ。イペシペツの父の家には炉が2つあつた。父親はクマをよく捕る人なので2つ炉があつた。上座の方の炉は、カムイ アペソ kamuy ape so と言つた。炉の2つある家は、阿寒では、土佐トウサクさんの家一軒だけだ。

[阿寒 小鳥サワ氏]

布施のじいさん(兵助)は、私の母の妹の夫だ。父親が早くに死んだので布施のじいさんが父親代わりになつて育つた。布施のじいさんから私の夫も実の子どものようにカムイ kamuy (神)に関わることを何でも教えて貰つた。

布施のじいさんは、猟には行くがあまり魚とりはしなかつた。魚をとるのは、冬ぐらいのものだ。

[阿寒 小鳥サワ氏]

阿寒町のフブシナイのコタンにパルカ parka というじいさんとシトビオ sitopio というじいさんがいた。二人とも親戚のない人で健康な時には薪とりなど、他人の家のお手伝いをしては

食べさせてもらっていた。皆が世話をして、面倒を見ていた。病気になって動けなくなれば近所の人が世話をしてやった。

[阿寒 小鳥サワ氏]

#### 6-1-4 親族名称と親族関係

ハポ hápo 母親  
アチャ aca 父親  
ユボ yupo 兄  
妹 覚えていない  
弟 覚えていない  
おばさん 覚えていない  
おじさん 覚えていない  
姉 忘れた

姉に呼びかけるときには、私の時代には、日本語で呼びかけていた。

[屈斜路 日川キヨ氏]

お父さん アチャ áca ~ aca  
お母さん ハポ hápo  
おじいさん エカシ ekási  
おばあさん フチ húci  
兄 ユボ yúpo  
姉 シャポ sápo  
弟 忘れた  
妹 忘れた  
おじさん アチャポ acapo、おんじ  
おば サポ sápo かな？ コンナルベ konnarpe、クコンナルベ ku=konnarpe (私のおば)  
男 オクカイ okkay  
女 メノコ menoko

私らの時代は「おとつつあん」「おつかさん」と言う時代だった。

(この他、「男の子」「女の子」を何と言ったかと尋ねるが思い出さないとのこと—編集者)

[阿寒 小鳥サワ氏]

父 ミチ míci  
母 ハポ hápo  
祖父 エカシ ekási  
祖母 フチ húci

兄 ヌポ yupo  
姉 サポ sápo。コサポ kosápo 小さい姉  
弟 (わからない)  
妹 (わからない)

[美幌 平林ミツエ氏]

まごばあさんの名前はモン。私が19歳の時に93歳でなくなった。(1844年生まれ) そのときユーベツ炭山の菓子屋に奉公に行っていた。そこでは厳しい行儀作法を教わったが、祖母の死で里帰りしてからは戻らなかった。

[阿寒 小鳥サワ氏]

美幌の木元ミツエは、布施のじいさんの娘で、私の母親の妹が布施の嫁なので、木元ミツエと私は従兄弟同士だ。当時、布施の子供達はみな阿寒湖に住んでいた。布施の子供と私たちは兄弟みたいに育った。

[阿寒 小鳥サワ氏]

私の祖母と徹辺フヨ氏はいところ同士だ。美幌は、菊池、徹辺という一族が主であった。徹辺は阿寒町の第一発電所から来ている。

[阿寒 小鳥サワ氏]

## 6—2 身体部位名称

頭 pake

私の頭 ク パケ ku pake、ク パケ イコクカ カニ ク イラムサン ku pake ikokka kani ku iramsan 「私のはんかくさくて分からない」

[阿寒 小鳥サワ氏]

お腹 忘れた

目 シキ siki

鼻 イトウ itu

私の鼻 ク イトウ ku itu

手 テク tek ～テケ teke

口 チャロ caro

耳 キサラ kisar

頭 パケ pake

髪の毛 忘れた 「髪の毛がほつれる」ということばもあつた

脚 チキリ cikir

膝 コクカパケ kokkapake

男性の陰部 チイエ ciye

女性の陰部 カクカ kakka

(このほか、耳、舌、歯、腹の名称と「鼻水垂らしている」という文を尋ねるが思い出さない  
とのことー編集者)

べろ (舌)

指 忘れた

歯 忘れた

痛い イクケウ アラカ ikkew arka 「腰が痛い」

チキリ アラカ cikir arka 「脚が痛い」

パケ アラカ pake arka 「頭が痛い」

[阿寒 小鳥サワ氏]

頭 パケ pake、メチャクコ mecakko。パケウエン pake wen (頭が悪い) と言って叱られた。

目 シキ siki。シキトウイ sikituy 「目腐れ、よく探せ」

口 チャロ cáro。チャロウエンクル carówenkuru 「口が悪い人」

舌 パルンベ parunpe

歯 (わからない)

鼻 エトウ etu。エトウウエン etu wen 「鼻が悪い」

顔 ナヌ nanu。ナヌピリカ nanu pirka 「顔がきれいだ」

髪 (わすれた)

あご (わすれた)

首 (わすれた)

喉 ワクカエンコレアン wakka en=kore an ~ワクカエンコレ wakka en=kore 「喉が乾いて水がほしい」

手 テケ téke ~ teké。テケオマレアン イチャクケレ teké omare an.icakkere 「手を洗ってこい。汚い。」

指 (わからない)

爪 (わからない)

足 チキリ cikiri

背 (わすれた)

尻 (わすれた)

腹 ピセ pise。ピセウエン pise wen した

「腹が痛い」(ニガキを飲ませられる)。クイペルスイアン ku=ipe rusuy an 「腹へつた」

膝 チキリウエン cikiri wen 「膝が痛い」

[美幌 平林ミツエ氏]

### 6-3 人名

昔は、二つ名前を持っていた。私は、キヨという名とトゥンケ tunke 「何かできた」という名を持っていた。ミナクシ minakus ~メナクシ menakus 「笑ってばかりいる愛嬌のある人」という名を持っていた。「笑う」は、ミナミナ minamina という。トゥットウルセ tutturse というあだ名は、「早い」という意味。役場には、キヨと届けたが、家族の者は、アイヌ語の名前のトゥンケを知っていた。

イソポ isopo (ウサギ) という名は、足が速いから名前をウサギとつけた。

名前は、かなり大きくなってからつけたものだ。5人きょうだいの3番目だが、妹たちはアイヌ名がなかった。和人名だけだった。

[屈斜路 日川キヨ氏]

まごばあさんは、モン、おばさん(母の妹で木元ミツエの母親)は、モエ、ばあちゃん(母)は、(旧姓舌川原)キサという。もう和人の名前だ。まごばあさんの時代には、役場がなかったもので、7~8歳になってやっと名前をつけた。まごじいさんの事を知らない。

[阿寒 小鳥サワ氏]

親や親戚から、運が悪いときには、名前を変えたと聞いた。体が弱いとこういう名前をつけるとか名前の付け方があった。

[屈斜路 日川キヨ氏]

### 6-4 身体の手入れ

#### 6-4-1 入墨・文身

まごばあさんは、手に網目模様の入墨をしていた。口のまわりにもしていたが、日高のように口の端をはね上げたようにはしていなかった。母親は、唇の上下に点のように入墨を施しただけだ。入墨は、手も口もシヌエ sinue という。焚火の炭の色をつけるのだが、痛いので嫌だと言って途中でやめた、と母親が言っていた。入墨は年頃になって嫁に行けるようになった印だ。

[阿寒 小鳥サワ氏]

#### 6-4-2 髪型と髪の手入れ

髪はまん中から横に分けて肩まで伸ばしていた。油物を食べると手についた油をもったいないからと自分の髪につける。カムイ kamuy (クマ) の油だから服で拭(ふ)いたらもったいないという意味だ。

[阿寒 小鳥サワ氏]

#### 6—4—4 風呂

モウル mour は肌襦袢みたいなもんだ。まごばあさんの時代には、女は、お日様、お月様に肌を見られてはいけないのでモウルを来て風呂に入った。モウルの中で身体をこする。

[阿寒 小鳥サワ氏]

#### 6—4—5 お守り・まじない

##### ペヌプ

ペヌプ pénuḥp ~ penup (イケマ) はお守りのようなもので、臭いはあまりきつくない。ペヌプをかじって、「ふっふっふっ」と吹いて体の具合が悪い人のぐるわ(体全体)を清める。熱も冷めるし、苦しみも取れる。孫もひこ(ひ孫)もやっているのだから、信じていいようだ。

ちよつと具合が悪い人、気がおかしくなった人(うつ病)を健康にしたいとき、ペヌプ(ごぼうのような根っこ)をかじっておはらいをすることがある。「魔物よ、離れろ」といって、息を吹き付ける。

夢見が悪かったり、うなされたりするときにペヌプを枕の下に入れる。赤ん坊が夜泣きするときにもペヌプを枕の下に入れて寝かせる。

私たちが小さい頃、孫婆さんや年寄りがペヌプを花形のメリンスでくるんで小さな袋にして、飾りみたいになんちゃんなの背の襟下に縫いつけてくれた。

タマサイ tamasay の石と石との間にペヌプを7つ、孔をあけて通しておくとならぬ除けになる。

子供に虫がおきた(引きつけをおこした)ときのために、ペヌプをへら状に作って置いておく。引きつけをおこして歯を噛みしめたら、へら状のペヌプを噛ませる。そうすると、引きつけを起こさなくなる。子供の歯も痛まない。また、柔らかいペヌプをかじって、魔除けにそこいらに吹き付けたり、枕の下に置いて寝せる。引きつけを起こす子供がいる母親に干したペヌプを持たせたことがある。

[阿寒 小鳥サワ氏]

##### ヨモギ

ヨモギをノヤ noya という。ノヤ カムイ noya kamuy ともいう。臭いがある。

風邪流行ったときに炉で魔除のためにヨモギをいぶして、フツサフツサという。魔物がくるようなときにもヨモギをいぶして煙で追い払う。

[阿寒 小鳥サワ氏]

#### 6—4—6 禁忌

燃やして駄目な木と塔婆にする木は薪に使わない。

土佐藤太朗さんの家には「床の間」のようなところがあつて、敷居で仕切つてあつて、その中に、イナウ、シントコなどが置いてあつた。その掃除は男がやり、また、女でも「おりもの（月経）」のあがつた女ならば掃除ができた。フチ huci 以外の女の人には敷居をまたがせない。（道東編2—3—3参照）

[阿寒 小鳥サワ氏]

#### 6—4—7 呪術

##### トウス

クマ送りのときクマの小指1本でも見えなくなつたら誰か彼かがトウス tusu（呪術）をする。指がなくては「山に行かれない」（クマの魂が神の国に帰れなくなる）からだ。大体は男がトウスをする。女がすることもあつた。

ある人の家でクマ祭りをしたとき、その娘が炭屋に炭を買いに行かされた。娘は炭屋の番頭といい仲だったので、炭屋の倉庫で寝てきた。カムイノミ kamuynomi（神の祈り）が始まつたとき、父親が突然腹病みを起こした。するとある年老いた男がトウスを始めた。トウスとは「いたつこ降ろし」「神おろし」のことだ。火がバチバチとおこり、年老いたトウスをする男に火の神が憑いた。トウキに酒が入つたのにカムイノミが進んで行かないと火の神は怒つて「おまえ、何やってきた。白状せい」と娘に言った。娘は白状し、泣いて謝つた。それを聞いてその年寄りがカムイノミをすると父親の腹病みがけろりと治つた。

母の妹の夫の布施兵助もトウスする人だつた。トウスする人は特に尊敬を集めていたわけではないが、カムイノミをするときは「上に立つて」「先頭になつて」する。カムイノミの序列は必ずしも年齢に比例しない。トウスする人が上だ。

[阿寒 小鳥サワ氏]

##### 呪（のろ）い

呪いのことをポニタク ponitak という。「ある人が憎いから、殺してやろう」「悪いものが付くように祈つてやろう」とイナウ（木幣）で人形のようなものを作つて呪いをかける。

孫ばあさんから聞いた話だが、日高の人には「祈り（呪い）をかけるたちの悪い人達」もいるそうだ。「だから日高の人は恐ろしいよ」と子供の頃に聞いたことがある。

シラカバ林のハンノキに5寸くぎで人形を打ち、ペンキで赤いのを垂らしてあつたのが見つかったことがある。シャモ（和人）がやったことだ。木の周りには四角に廻つた跡があつた。ワラビ取りに行つた人が見つけて、みんなでカムイノミをし、人形が打つてあつたハンノキを切り倒し、おはらいをして、人形を焼いて灰にして投げた。それをしたシャモは津別の人で死んだということだ。

[阿寒 小鳥サワ氏]

#### 6-4-8 夢占い

夢をタカラ *tákar* という。ネブ タカラ タカラ *nep tákar* 何の夢見るもんだか、良い夢をピリカ タカラ *pirka tákar*、悪い夢をウエンベ タカラ *wenpe tákar* とか言う。夢は守り神が見させるものだという。つらいことがあると必ずその夢を見る。

私は、死んだ親や兄弟に会いたくてあの世に行く夢を見た。親や兄弟の話は聞こえるけれど、目には見えない。姿を見せないで、「何して来るんだ。帰ってくれ、来ないでくれ」、と言われて帰ってきた。

[屈斜路 日川キヨ氏]

#### 6-4-9 守り神

夢は守り神が見させるものだという。

[屈斜路 日川キヨ氏]

母親は自分の神様を持っていた。カムイフチ *kamuy húci* (守り神) と言っていたと思う。いつも仏様の横に置いてあった。死ぬ前にその守り神を送らないと、自分が死んでもあの世に行けないと言って、死ぬと分かった時にエカシを頼んで、カムイノミ (神への祈り) してもらって守り神を送ってもらった。人が死んでから後にそのような守り神を送るのは送り方がたいへんなので死ぬ前に送っておくのだという。

高さが20cmくらいで、丸いイナウの家のような形をしていて、イナウの削り掛けが束ねてあって垂れ下がっていて、そのまん中が入口のように開いていて、その中に人形のような物が入っていた。これは母が具合が悪くなったときにトウス *tusu* をやる人に作ってもらったものらしい。まごばあさんは持っていなかったから誰でも持っているというのではないらしい。母は、死ぬ前に日川のじいさんに頼んで送ってもらった。舌川原の本家のヌサ *nusa* (祭壇) の陰へ持って行って焼いたらしい。守り神を焼いてもらってから間もなくして死んだ。

作ってもらっても今は守り神を送ってくれるようなエカシがないので困る。最近でも近所の奥さんも持っていた。私くらいの年なのに守り神を持っていた。死んでから守り神があることが分かったが、ある男の人に頼んだが、死んでからやる送り方を知らないから嫌だと断われた。仕方なく息子がお墓に持って行って焼いてきたらしい。

[阿寒 小鳥サワ氏]

#### 6-5 人の一生

大正8年6月4日阿寒湖畔のポツケ *popke* で生まれた。現在、前田一步園の北西に湯の湧き出しているポツケがあるが、湖畔伝いに石川啄木の碑を越してさらに行くとアイヌの家が2、

3軒あった。そこが私の故郷だ。

[阿寒 小鳥サワ氏]

ポツケで生まれたが、ポツケの家は、崖の下の平（河岸段丘）になったところに2、3軒の家があった。河岸段丘には今は木が生えているが、当時は木もなかったので、そこで畑を作った。笹も今ほど深くなかった。

国道から行くと原野と呼ばれる釣り客が多いところから下がった方に小川があり、そこまで水汲みに行った。大島までは行かないが方向としてはパンケトーに向かって行く。水汲み場には湧き水が出ていた。ポツケからの岸は、今は水がおおっているが当時は砂原だったので、たいした遠くも感じなく水汲みに行った。

[阿寒 小鳥サワ氏]

現在の前田一步園の中の阿寒湖荘というホテルのそばに土佐藤太郎という人が住んでいた。

私が6、7歳のときマルマツ造材部、アキモク造材部が入ってきて、湖畔にも造材関係の人が多く来るようになった。

イペシベツの左岸に家があつて、そこで火事にあつて後に右岸に引っ越す。そこで布施のじいさん一家もくる。

[阿寒 小鳥サワ氏]

私が9歳のとき父がいなくなり、母と子供の6人暮らしで母は山子したり、ヒメマスを釣ったりして何でもして働いて子供たちを食べさせた。私は、初太郎、正雄、サワ、フサ、正吉の5人兄弟の3番目である。

[阿寒 小鳥サワ氏]

孫じいさん エカシ ekasi の名前は覚えていないが、孫ばあさん フチ húci の名は舌川原モンという人で、93歳まで生きた人だ。

[阿寒 小鳥サワ氏]

母は度胸のいい人でクマの糞があるところも平気であるいた。母と2人でシイタケをとるのに木に登っていると。クマの背が見えた。もしもクマが木に登ってくるようだと切りつけようと腰にさげていた「薄刃（なつきり包丁）」に手を掛けていた。そういう人だった。

[阿寒 小鳥サワ氏]

私は舌辛（シタカラ）川の布伏内（フブシナイ）にいる秋原雄介さんのところに養女に行った。私が19才のとき、夫となる人(当時27才) が約80人の団体とともに、岐阜から流送人夫と

してきた。その人だけが急性肺炎で残った。看病をしたのがきっかけで結婚することになった。

私の夫の姓「小鳥」は岐阜県の名前で、本当は「おどり」というのだが、いつのまにか「ことり」になった。

本当は、秋原には息子がいて息子の春吉さんと結婚するはずだった。息子の春吉さんも流送人夫として働いていた。川の堤をぱつと切り離して丸太を流したとき、丸太と一緒に流され、亡くなった（堤とは、川に木をたくさん立てダムのようにしたもので、丸太をそこに集めておく。木の1本をはずすと丸太が一気に流れ出す仕掛けになっている）。

その後、雄阿寒ホテルのすぐ上のひょうたん沼のところに造材屋がきて仕事をしていた。岐阜から来た人たちも1年くらい働き続けていた。そこにサワさんとサワさんの母親も手伝いに行った。母親が後のサワさんの旦那さんを気に入ったため、結婚することになった。

[阿寒 小鳥サワ氏]

父親の布施兵助は、北見の端野（タンノ）のチウシで明治26年6月6日に生まれた。母親は、明治30年11月（正確な年月日は不明）徹別（テシベツ）生まれで、旧姓を舌川原キンという。

父は、端野の出身だが、湧別川に流送の仕事に行った時、うちの母と知り合って結婚した。最近になってわかったことだが、父親の本籍は美幌（ビホロ）にあった。書類が役場に残っていた。生まれは端野らしい。そこはいま下水処理場になっている。父の兵助は馬の医者もやった。肉離れで馬の肩が腫れて空気が入ると痛がるので針を刺して空気を出してなおした。

[美幌 平林ミツエ氏]

木元氏は大正15年2月20日生まれ。相生の秋田団体（開拓農家）の生まれ。蛇が多くて父母はそこから一年か二年で出てしまった。

（小鳥氏 第一発電所のところに土地があった。）

母方の祖母とイペシベツ（阿寒）で一緒に暮らしていたことがある。6才まで阿寒にいた。馬の背にリング箱下げて、駄鞍にして、そこに私や弟が入って、美幌に引っ越したのを覚えている。

（9才の時、小鳥氏の父が亡くなったので、それからは布施兵助が父代わりだったので、木元氏と一緒に暮らしていた時期が長い。

[阿寒 小鳥サワ氏]

美幌に徹辺さん、という、ハボ hápo、オドと呼んでいたおじいさんとおばあさんがいた。うちの母の本家にあたるらしい。父親の土地が野崎に5町位あったので美幌に引っ越した。大部分の人は2町くらいだが、うちは割り当てが多かった。やちぼうずのある悪い土地だった。田を作ったが、隣人との関係がうまくいかず、田の水を止められるなどのいざこざが多かった

ので、野崎から水原（ミズハル）というところにまた引っ越した。私が7才位の時だ。

12才位の時、常呂町福山（フトチャナイ）という所に移り住んだ。日吉というところに畑があったのだ。常呂川が近くで魚がたくさんとれた。

[美幌 平林ミツエ氏]

熊谷キシというおばあさんは、私達が常呂に移り住むときまで1人で畑を作って暮らしていたが、私達が常呂に住むようになると私達の家同居するようになった。このおばあさんがいたおかげで、私はクマの飼い方を覚えた。

[美幌 平林ミツエ氏]

兵助氏は常呂で葦原の中に見つからないようにこっそりと田圃を作っていたので米には困らなかった。

[阿寒 小鳥サワ氏]

#### 6-5-1 恋愛と結婚

私が18歳のとき、父が不在地主だということで、美幌の役所に用があつて出かけた。そのとき、野崎に泊まったが、酒の勢いで私を美幌のアイヌの名家へ嫁に行かせると約束してきた。私はいやで断つたが、迎えの馬車が常呂まで来た。破談になったため、20円の罰金を要求された。

[美幌 平林ミツエ氏]

#### 6-5-2 出産

自分の家で子どもを産む。私は、一人で、家の中に押入みたいな産室を別に作ってそこに藁布団を敷いて、子どもを産んだ。私の時代は、妊産婦手帳をもらわなければならなかったが、私は、一番上の子を母親が取り上げてくれた。当時は、産婆さんがいたが、二番目からは自分一人で産んだ。お湯だけそばに持ってきて貰って自分で産湯を使わせた。

お産するときに、陣痛で痛む腹を母親などがさすりながら妊婦にがんばれという意味の歌を歌った。

オサーノー サノー アーエーワーエー

osano sano a e wa e

オサーノー サノー

osano sano

夫は、妻の苦しむ姿を見たくないで近くにはいない。

[阿寒 小鳥サワ氏]

昔は、難産の時に妊婦に臼を背負わせて歩かせた。お産が軽くなるという。

[阿寒 小鳥サワ氏]

へその緒は、へそから一握りの長さだけを残し、新しい挟みで切って新しい糸で切口を結ぶ。便所の北側に持って行ってへその緒を埋める。自分の家の北の方に埋める。日が当たらないから、便所の北側に埋めると母親が言っていた。後産も流産したときにもそこに埋める。

[阿寒 小鳥サワ氏]

飯場で働いていたとき、重い薪を背負おうとして力を入れて流産した。山子や馬追い、藪出しする人や60人もの飯場の人を休ませる訳にはいかないから、黙っていてくれと言われた。それで夫が飯炊きを代ってくれた。山で誰もけががないようにと神に祈っていたら、無事に誰もけがをしなかった。

[阿寒 小鳥サワ氏]

赤ちゃんを産むと7日から21日の間、お日様に失礼だから、お日様に当てられないとタオルでも風呂敷でも何でも被りものをつけて外を歩いたものだ。赤ちゃんを産むと21日くらい風呂にも入らない。岡湯を使った。血の気がないので風邪をひきやすいから、なるべく外に出ないようにする。

7日から10日くらいの間、食べ物にも制限があった。おかゆにカツオブシくらいだ。白菜やキャベツなどを食べると出血が多くなるからと食べさせられなかった。肉も駄目、魚はいいが脂の多い魚は駄目だ。

[阿寒 小鳥サワ氏]

産後は、同じ下の炉を使うが煮炊きを別な鍋でした。お腹の中に子供のいるときは鍋を変えることはない。

[阿寒 小鳥サワ氏]

末っ子の頃には墮胎する人が増えてきた。子どもを墮ろすかという話になったとき、ばあさん（母親）は、人殺しをする気かとカンカンになって怒った。せつかく授かったのと言って墮ろさせなかった。

[阿寒 小鳥サワ氏]

21日目にカムイノミkamuy nomiして子どもの無事を祈るくらいで祭りをするなどなかった。

[阿寒 小鳥サワ氏]

### 6—5—5 子供の遊び

子供頃、阿寒湖の子供は皆夏になると遊ぶものがないので、今の銀行から阿寒湖荘の所まで泳いでいたので皆泳げた。

[阿寒 小鳥サワ氏]

### 6—5—6 葬礼と先祖供養

#### 亡くなる徴候

病気などで死にかけている人が「窓から花を持ってきた」などと言うようになったら死期が近いという印だ。母も、そのように言ってから間もなく死んだ。

[阿寒 小鳥サワ氏]

#### 生前の準備

まごばあさんは、年をとって動けなくなったら腰紐（下帯）を体から外してカバンに入れておいた。そのカバンを枕にしていた。死んだ（ライオマン ray oman）ときの棺箱にあたるものをキナで自分の背丈くらいの長さに作ってカバンに入れて枕にしていた。枕にしていたものはすべて死んだときに一緒に送ってやらなければならない。（道東編8—4—4参照）私の代にはもう腰紐がなかった。

[阿寒 小鳥サワ氏]

#### 死出の旅支度

体、顔を隠してキナ kina の中に入れて手もキナの下に隠して縄で縛って葬式を出す。キナで包んだ遺体は箱にいれて土葬する。

キナをしぼる紐は、シコロの皮をなつたものである。

死装束の着物は、通常の服と仕立て方が違う。半分だけ縫い飛ばして縫う。結び目もつけない。

服を死人に着せるときは、少し破く。袖も破く。普段は左前で合わせるが、死装束は右前で合わせる。

コンチ konci（被り物）は、先をとがらして額のところでしぼる。布で目も口も隠す。ウシペ uspe 脚半（ケハン）もすぐにほどけるくらいであまり真手（まて）に作らない。テクカシ tekkasi（手甲）もつけるがやぶっておく。

タマサイ tamasay（玉の首飾り）は、死体をくるんだキナ kina の上に首に下げないで、胸に置くだけ。あの世で自分で首にかけなさい、という意味だ。タマサイに傷をつけたりしない。タマサイの紐にちょっと傷をつける。

木製の煙草入れについている紐をマキリで切る。自分で紐をつけなさい、という意味だ。キ

セリ kiseri (キセル、煙管) も送る。

ムククリも棺に入れるがやはり紐を切る。

刃物も入れて送った。

父親(猪狩茂助)が70年前に六十いくつかで亡くなった。母親は、私が嫁にきてから84歳で亡くなった。火の前では寝せない。

[屈斜路 日川キヨ氏]

#### 引導渡し

坊さんは「行くところを間違えないで言ってください。決して戻ってこないように、いい仏になって下さい。親の側、兄弟の側(そば)に行ってください。」とアイヌ語で拜んだ。クマ送りでカムイノミする人がイノンノイタク inonnoitak (引導渡し) する。

[屈斜路 日川キヨ氏]

#### 遺体の搬出

棺にタラ tar (荷縄) を2本通して、その紐に棒を通して二人で担ぐ。棒はハンノキは使わないがナラでもイタヤでも何の木でもいい。

東のプアル puar (窓) から出す。遺体は、神窓からは出さない。人間は人間の窓や戸から出す。戸口からは出さない。年寄りが死んだ時に戸口の横を破って出す人もいる。父親の時は、戸口から出した。

[屈斜路 日川キヨ氏]

#### 埋葬・墓地の位置

墓地は、川の近くで、コタンより川の上流の方だ。北にも東にもあった。

槍の形や団子の形などいろいろな形の塔婆があった。布を巻いてあるのもあった。他の地方から来た人の塔婆でT字型のものがあった。墓穴の中に棺を入れるとき頭を東に向けて安置する。

[屈斜路 日川キヨ氏]

#### 供物

墓に供える食べ物は、チョツケプ cotkep (野菜の混ぜ物) などで、チェプ cep (魚) は、切つてフキの葉の上に置く。

[屈斜路 日川キヨ氏]

#### 墓標

塔婆は男も女も同じで、木の頭を削って、そこに字を書いていた。死んだ人の名前を書いて

あった。

[屈斜路 日川キヨ氏]

#### 副葬品

墓で、女の人には、ポン ナベ pon nape (小さい鍋)、茶碗、パスイ pasuy (箸) を塔婆の前に置く。

男には、塔婆の前にトゥキ túki (杯) を置く。

死んだ人にイナウを持たせることはない。

[屈斜路 日川キヨ氏]

亡くなったときに厚司などの着物は墓の側に持って行って燃やす。

[阿寒 小鳥サワ氏]

#### 家送り

徹別のオンネチセ onne cise (大きな家) の人が亡くなった時、オンネチセを焼いて送った。死んだ人が男でも女でも家を焼いて送った。死人が生前大事にしていたもの、宝物を焼いてしまう。キナ kina も焼いて持たせる。

家を送るのは、オンネチセばかりではなく、普通の人の家も焼いて送った。家を失った人は自分の子供の家に移って住む。私が一人前になった頃からもう昔のような葬式はしなかった。

[屈斜路 日川キヨ氏]

死んだときに家を燃やすのは聞いたことがない。身寄りのない人 (たとえばパルカとシトビオというじいさん) (道東編6—1—3参照) が死んだ時、その家を継ぐ人がいないので燃やしてしまう。

[阿寒 小鳥サワ氏]

徹別では、葬式の時にウポポなどしないものだ。長女が3つの時、夫の故郷の日高の長知内に2年間住んだ事がある。驚いたことに日高では、葬式の日には歌ったり踊ったりする。

長知内の人のことばも歌も葬式の仕方はずいぶん違った。2年過ぎてから徹別の親の元に帰った。

[屈斜路 日川キヨ氏]

### 6—5—7 死生観

#### 先祖供養

祭りがあつた時にイチヤルパ icarpa (先祖供養) をやる。新しく亡くなった人は汚れてい

るから祭りには呼ばれない。一年忌が過ぎたらイチャルパに参加できる。イチャルパはヌサ nusa (祭壇) の前です。ヌサは向かって右側がカムイノミ kamuy nomi をするカムイヌサ kamuy nusa で、左側がラムヌサ ram nusa (低い祭壇) とかエカシ ヌサ ekasi nusa と呼ぶイチャルパをするための祭壇である。このヌサの前で先祖供養をする。これをエカシ ノミ ekasi nomi とフチ ノミ húci nomi という。先祖供養のことをエカシ、フチ ノミ アン ekasi, húci nomi an、イチャルパ エカシ ノミ icarpa ekasi nomi という。エカシとかフチとかは、亡くなった古い先祖のことを言う。先祖供養は男も女もやる。亡くなった人の数だけイナウを用意し、シラリ sirari (酒粕) も団子もイペ ipe (食べ物) は何でも供える。

イチャルパに使うイナウは、普通のイナウと形が違う。イナウにはイトクパ itokpa (祖印) やシロシ sirosi (印) を付けたりはしない。イナウ 1 本に 1 人の仏の名前を言ってあげる。亡くなった親族の多い人の場合、一人の人が何本ものイナウを上げることになる。

イナウを送るとあの世に届き、食べ物やシラリも届く。「この世で楽しくやっていますので、そちらでもドブクを作って名前のわからない先祖も呼んで飲んで下さい」と祈る。

前の年のイナウは翌年に清めてから燃やす。

屈斜路では、毎年、10月から11月の秋祭りの時にイチャルパをしている。

[屈斜路 日川キヨ氏]

お盆にお墓にお参りに行きイチャルパ icarpa をやる。火を起こしてイチャルパをやる。

[屈斜路 日川キヨ氏]

お盆の墓参りにシト sito (団子) でも、シケレベ sikerpe (シコロの実)、野菜、イモ、豆をいれて混ぜたチョツケプ cotkep (混ぜもの料理) を持って行った。団子は、ポン ニス pon nisu (小さい臼) で米をついて粉にして作った。団子はお椀に入れて、2つの椀を塔婆の左右に置き、左右を5つから7つで同じ数にする。団子は丸くなく平べったい形にする。

[屈斜路 日川キヨ氏]

### 先祖供養と子供

イチャルパ icarpa (先祖供養) で亡くなった子供にはイナウを渡さない。若い人にもイナウを渡さない。子どもにはイチャルパをしない。40歳か50歳ぐらいの人にしかイチャルパしかしない。子供が亡くなった時にどのように葬式をするのか知らない。

[屈斜路 日川キヨ氏]

### あの世について

ライペ コタン raype kotan (死者のコタン) に行つて、ライペ ウタラ raype utar (死んであの世にいる親戚) のチセ cise (家) に行きなさい、という。しかし、それ以上詳しくは

聞いていない。カムイモシリ *kamuymosir* は神様のいる所なので、カムイモシリとは違うところらしい。ネコン カ ネヤクカ *nekon ka ne yakka* 「どこにあるのか」わからない。死んだ人のいる所をオアラ モシリ *oar mosir* とかアウン モシリ *aun mosir* というらしい。

アフン チャロ *ahun caro* という言葉は聞いたことがない。

[屈斜路 日川キヨ氏]

親戚が亡くなった時に、あの世に行く時のことを夢を見た。死んだ人があの世に行くのに流れが急な川に架かっているポン ルイカ *pon ruyka*、ポン ハシ *pon hasi* (小さい丸木橋) を渡って行かなくてはならないのだが、亡くなったある親戚が渡ろうとするが、橋として架けてある木が揺れてどうしても渡れない、と言う。私は、亡くなった親戚に「橋を渡らないとあの世に行けないから、行くところに行けないから、早く渡りなさい、そら渡れ」と気合いをかけたのでやっとならぬと渡れた、という夢を見た。コンカネ ルイカ、ホー ルイカ、シロカネ ルイカ、ホー ルイカ *konkane ruyka, ho ruyka, sirokane ruyka, ho ruyka* という死んだ人が橋を渡るときに「落ちないで渡りましょう」と声で気合いをかけて励ます歌がある。そのような川をウエンペ ペツ *wenpe pet*という。

父母の話だと、川に架かっている橋は気持ちのよい人でないと渡れないものだ。一年かかっても渡れない人もいる。

[屈斜路 日川キヨ氏]

私は、死んだ親や兄弟に会いたくてあの世に行く夢を見た。親や兄弟の話は聞こえるけれど、目には見えない。姿を見せなくて、「何して来るんだ。帰ってくれ、来なくてくれ」、と言われて帰ってきた。

[屈斜路 日川キヨ氏]

### 先祖供養

イチャルパ *icarpa* (先祖供養) に2種類ある。1つはカムイノミのときに行うもので、もう1つは、マリモ祭りのときヌサ *nusa* (祭壇) の横でするものだ。

年に1回、マリモ祭りの時に「アイヌ部落」にあるポンチセの裏のヌサで行う。参加するのは女でも男でも良い。だれそのイナウと言ってエカシがイナウを渡す、呼ばれた人がイナウをもらいに行く。イナウを刺すところ (イチャルパヌサ *icarpa nusa* 先祖供養の祭壇) が作つてある。先祖の名前を言ってイチャルパする。

イチャルパヌサはカムイヌサの左横にあるべきものだ。イベシベツのヌサにも左横にあった。秋辺音吉さんが元気な頃も、カムイヌサの左にイチャルパヌサがあった。しかし、釧路のあるエカシは右横だと主張していた。カムイ送り (クマ送り) のときはこのヌサに何もしなかった。また、昔の人は墓参りということをしなかった。季節は夏だろうが、冬だろうが、どぶろくを

作ったときにイチャルパしていた。

母親や孫ばあさんはたばこと麴をもって歩いたみたいだ。イチャルパヌサの側を通るときはいつでも、チャツチャリ *catcari* (撒き散らす) する。女の人がある。マリモ祭りの時に改まってイチャルパするのは新しいやり方で、昔はそばを通ったときにチャツチャリして歩くだけだった。徹別に墓があるが、細道(道路)を通るときに、あつちの方角に墓があるなど思ったら、母親はそこに向かってフチ *húci* (祖母) の名前を言ってチャツチャリしていた。

[阿寒 小鳥サワ氏]

阿寒町に無縁仏の土蔵が建った。お骨を全部集めて骨堂に納めてある。毎年、そこにイチャルパに行っている。シャモのお坊さんのお経が終わった後、アイヌのイチャルパをしている。

[阿寒 小鳥サワ氏]

家の中のヌサ *nusa* (祭壇) で先祖供養(イチャルパ *icarpa*) をするために先祖供養用のイナウ *inaw* (木幣) が刺してある。供物に食べ物は自分が一かじりかじってイナウの頭の上に食べ物を乗せる。そこに酒を垂らす。トゥキ *túki* (杯) を回すから女の方はオンカムイ *onkamuy* して受け取って、酒をイナウの頭の上に垂らす。イチャルパのイナウは何年も置いておく。

[阿寒 小鳥サワ氏]

#### クマ祭りのあとの先祖供養

エカシ *ekasi* (おじいさん) が炉に向かってカムイノミ(神への祈り) をする。終わったら、オンカムイ *onkamuy* しながらフチ *húci* (おばあさん) にトゥキ *tuki* (杯) を渡す。フチも静かにオンカムイしながらトゥキを受け取り、パスイ *pasuy* で家を清めてからイチャルパをする。燗を2、3個、炉の中心から下座の方に移してそれに向かって祈る。イチャルパは死んだ仏さんに祈ることだ。飲み残した酒を静かに燗に注ぐ。火が消えてもいい。トゥキを空にしてから「お酒をつぎなさい」という言葉を言うと酒注ぎ人(若い男)が注ぎに来る。イチャルパはその場にいるフチ達全員が順にする。客で来ているフチたちが次々にイチャルパして、最後に家主のフチにトゥキがもどり、これに酒が注がれ、フチはそれをエカシに戻す。イチャルパは、自分の先祖だけではなく、無縁仏みんなにするものだ。酒だけではなく、火の神様(炭)に塩、麴、米、たばこをささげる。燗を炉の中心から下手に移すのはイチャルパは神様にはできないので「一步下がってやる」ということだ。終わったら燗を火元に戻す。

最後に家主のフチにトゥキを渡す。お酒をつぐ若い男の人がまわって来て酒をつぐ。家主のフチにお酒をついでから、まわりの男の人たちにお酒をつぎ、「終わりましたよ。飲んでもいいよ、カムイノミをしていいよ」、という言葉をお酒をついだ若い人が言う。フチがお椀を持っているのでオンカムイしてからエカシに再度お酒を渡す。

男の人全員がトウキを持ってオンカムイをする。右、左、真ん中の順にトウキを差し上げてオンカムイする。そのときには主宰者の家のフチも隅で、一緒にオンカムイする。フチはトウキを持たずに男の人の動作にあわせ、小指と小指をあわせる程度（小指どうしは触れない）に軽く上下させるのみでオンカムイする。

最後にエカシが火の神様に終わりましたという挨拶をする（このとき火の神様にパスイでお酒を捧げる）

[阿寒 小鳥サワ氏]

昭和17年頃から、端野のチウシのハッカ畑で草取りをしていたらセプパ seppa（鏝）が出てきた。おばの布施タマ（父の末妹）という人から、ライクル raykur（死人）のものだから、そんなもの、と怒られて藪に捨てさせられた。タマサイ tamasay（首飾り）も出てきたので、それはこっそり持ち帰った。昔の人はキセル（煙管）でもなんでも死んだら一緒に埋めたものであった。最近、徹辺のばあちゃんに言われて鏝とタマサイを見つけたところに行ってタバコを捧げてきた。

[美幌 平林ミツエ氏]

#### 6—5—8 女性とカムイノミ

カムイノミする時には、女でも家の神様に酒を振りまきながら清めた後、口の上の鼻の下を人差指で左から右になでるようにして、イヤイライケレ iyayraykereと言う。

女性でパスイ pasauy（酒箸）を使うのはエカシ ekasi の隣に座ったフチ húci（おばあさん）だけだ。

主人である男が両手を広げてオンカムイ onkamuy している時に、手を左に振り、右に振り、まん中に持ってきたときに、フチ húci も軽く会釈する。

カムイノミの後、燗を2つか3つ炉の下（しも）の炉へ移してお祈りをする。

炉が一つの時は、その炉内の下手に燗を移して祈る。これをフチ húcinomi という。アペウチカムイ ape uci kamuy、アペ ウチ フチ ape uci húci、チセ カムイ cise kamuy とかに祈ること。

フチノミをやったところで女の人が集まってイチヤルパ icarpa（先祖供養）する。正月でもカムイノミがある時にはかならず女の人が集まって先祖供養する。（道東編6—5—7参照）

炉が2つある場合上座の炉には女が入ってはいけないので、この地方では、酒注ぎは女がするものではない。

女の人でも、年を取った人、（月経の）あがった女の人が酒を作る。あがってない女性は汚れるから駄目だという。だから私は何十年も酒造りをした。酒を作るまでが女性の仕事で、酒ができて男の人に渡してしまうと女は触らない。だから、酒を注ぐのは男の役目だ。（道東編2—3—2参照）

[阿寒 小鳥サワ氏]

他の村に行った時に、イチヤルパ icarpa (先祖供養) があつた時には、その村の人が全員終わった後で、イナウを捧げる。

[阿寒 小鳥サワ氏]

## 6—6 人間の動作・仕草

カムイノミする時には、女でも家の神様に酒を振りながら清めた後、口の上の鼻の下を人差指で左から右になでるようにして、イヤイライケレ iyayraykere と言う。

主人である男が両手を広げてオンカムイ onkamuy している時に、手を左に振り、右に振り、まん中に持ってきたときに、フチ huci も軽く会釈する。女は、手をすり合わせたオンカムイはしない。軽く手を上下するだけだ。

[阿寒 小鳥サワ氏]

## 6—8 交易・通婚・戦争

### 6—8—2 通婚

美幌、白糠、釧路、フブシナイには娘のやりとりがあつて、親戚が多かつた。帯広、日高とはそのような関係はなかつた。

[阿寒 小鳥サワ氏]

美幌には日高からアイヌの農家が沢山来ている。私の嫁もそのような家に嫁いだ。

[阿寒 小鳥サワ氏]

祖母は徹辺 (テシベ) の「まき」(一族) だ。徹辺と秋辺 (アキベ) の姓は徹別から出た人の姓だ。

徹別 (てしべつ) には十代の頃行つたことがある。徹別の第一、第二発電所に親戚がたくさんいた。孫じいさん (母方のおじいさん) は、そこに土人地 (給与地) をもらったが、阿寒湖に来ているうちにとられてしまった。

日川キヨさんも徹別の第一発電所にいた。お父さんの名を茂助といつた。日川キヨさんの父とばあさんはいくらか親戚だつたらしい。

[阿寒 小鳥サワ氏]

斜里の人とは私らの時代になってから親戚関係ができた。

[阿寒 小鳥サワ氏]

白糠の男が藻琴の女性と結婚して藻琴に住んだことがある。それは私らの時代になってからのことである。藻琴にはアイヌの部落があった。その人の娘が美幌の菊池股吉氏と結婚し、その娘が私の三男と結婚した。菊地股吉氏と結婚した娘の孫ばあさんは日高の人だが、母親は藻琴生まれだ。

[阿寒 小鳥サワ氏]

#### 6-8-4 村と村との関係

十勝と釧路のアイヌは仲が悪かったらしい。しかし足寄の人たちとは言葉は同じだ。今の足寄のダムから山奥に入ったところにキトウシ kitousi というところがあり、行ったり来たりしていた。足寄から「おっばい山」の方向に入ったところだ。足寄の人の話は聞くことはない。クマ祭りに来たということも聞かない。

[阿寒 小鳥サワ氏]

足寄から阿寒湖畔のクマ祭りに来たという話は聞かないが、美幌・釧路・白糠からは来た。しかし、屈斜路・弟子屈から来たということもあまり聞かない。土佐藤太郎は塘路の人だからそこからはよく来た。また、鶴居からも八重九郎さんとその親戚が来た。

[阿寒 小鳥サワ氏]